

## 戦争、疫病の中に生きる人間像

— ジョージ・A・バーミンガム、アルベール・カミュ、  
ガルシア・マルケス —

八 幡 雅 彦

Portrayals of Humans Living amid War and Pandemics: George A. Birmingham,  
Albert Camus and Garcia Marquez

Masahiko YAHATA

### 【要 旨】

2020年からの新型コロナウイルスの世界的蔓延に伴って古今東西の疫病を描いた文学作品がにわかに脚光を浴びようになり、筆者は、北アイルランド出身の小説家ジョージ・A・バーミンガムの作品は、人間の新型コロナウイルスとの戦いを考えるうえで意義と価値を有しているのではないかという思いを抱いた。本稿は、第一次世界大戦を題材にしたバーミンガムの長編小説『蜘蛛の糸』(1915年)、従軍記『フランスの従軍司祭』(1918年)及び短編小説集『我らの犠牲者』(1919年)を取り上げ、疫病小説の名作であるアルベール・カミュ『ペスト』(1947年)、ガルシア・マルケス『コレラの時代の愛』(1985年)と比較しつつ、戦争、疫病の中で人間が見せる本質を論じることにより、バーミンガムの作品が、これらの災禍を克服するうえで必要な「無言のヒロイズム」「地球規模的ナショナリズム」「ユーモア」をどのように体現しているかを検証し、バーミンガムの作品が有する現代的意義と価値を明らかにする。

### 【キーワード】

戦争と疫病 人間の本質 無言のヒロイズム 地球規模のナショナリズム ユーモア

### 【Abstract】

Since the worldwide outbreak of the COVID-19 in 2020, literary works depicting pandemic diseases, ancient and modern, east and west, suddenly have come into the spotlight. The present writer harbored the idea that the works by George A. Birmingham, a novelist from Northern Ireland, may have significance and values when we think of our fight against the COVID-19. The present paper picks up Birmingham's long novel, *Gossamer* (1915), war memoir, *A Padre in France* (1918), and collection of short stories, *Our Casualty and Other Stories* (1919), and discusses human natures observed in war and pandemics, while comparing them with Albert Camus, *The Plague* (1947), and Garcia Marquez, *Love in the Time of Cholera* (1985). It also investigates how Birming-

ham's works embody "silent heroism," "global nationalism," and "humor," which are necessary to overcome these disasters, and thereby reveals the significance and values that Birmingham's works have.

### 【Keywords】

war and pandemics human nature silent heroism global nationalism humor

## はじめに

2020年からの新型コロナウイルスの世界的蔓延に伴って古今東西の疫病を描いた文学作品がにわかに脚光を浴びるようになった。北アイルランド出身の小説家ジョージ・A・バーミンガム(1865年-1950年)は、決して疫病を描いているわけではないが、筆者は、人間の新型コロナウイルスとの戦いを考えるうえでバーミンガムの作品は意義と価値を有しているのではないかという思いを抱いた。本稿は、第一次世界大戦を題材にしたバーミンガムの長編小説『蜘蛛の糸』(1915年)、従軍記『フランスの従軍司祭』(1918年)及び短編小説集『我らの犠牲者』(1919年)を取り上げ、疫病小説の古典的名作であるアルベール・カミュ『ペスト』(1947年)、ガルシア・マルケス『コレラの時代の愛』(1985年)と比較しつつ論じることにより、バーミンガムの作品が、人間が戦争、疫病といった災禍を生きるうえでいかなる重要な示唆を与えているかを検証し、バーミンガムの作品が有する現代的意義と価値を明らかにする。

## 『蜘蛛の糸』のうちに見るコロナショックの予兆とその克服の可能性

バーミンガムはしばしば予言的な作家と言われる。デビュー作と見なされている『煮えたぎる鍋』*The Seething Pot* (1905)においては旧約聖書の「エレミア書」のうちの1節「煮えたぎる鍋が見えます。北からこちらへ傾いています」を引用し、北アイルランド問題の根深さを隠喩的に指摘し、未来永劫に続くことを予言し

ている。<sup>1)</sup> またロイ・フォスターは『アルスターの赤い手』*The Red Hand of Ulster* (1912)を「妙に予言的だ」と評した。<sup>2)</sup> この小説は、20世紀初頭、アイルランド自治法を導入しようとするイギリス政府に対して北アイルランドのユニオニストが激しく抵抗し、戦争を起こす物語である。<sup>3)</sup> 奇しくもこのユニオニストとイギリスの対立は、100年以上を経た今日また繰り返されることとなる。2016年にイギリスがEU離脱を正式決定し、イギリスとEU諸国の間で税関国境を設けることが必要となった。1998年のベルファスト和平合意で南北アイルランドの間には税関を設けないと規定されており、そこでアイルランドとイギリスを隔てる海峡に新たに税関国境を設け、イギリスから北アイルランドに入ってくる物品は税関検査を受け、そのうち南のアイルランドに移動する物品に対して課税するという取り決めがイギリスとEUの間でなされた。これに対して北アイルランドのユニオニストたちは南北アイルランドの統一を助長するものと激しく抵抗し、未だにこの取り決めは完全履行に至っていない。<sup>4)</sup>

この小説から3年後、第一次世界大戦勃発直後に出版された『蜘蛛の糸』*Gossamer* (1915)にも、出版後から現代にいたるまでに起きたいくつもの歴史的な事件を予言する、あるいはそれらの予兆となる出来事が描かれている。

1913年秋、ニューク行きの客船の中で、ジェイムズ・デイグビー、マイケル・ゴーマン、カール・アッシャーの3人が出会う。デイグビーは、かつてはアイルランドの不在土地地主で今はロンドンに住む。ゴーマンはアイルランドのナショナリスト政治家でジャーナリスト兼小説家でもある。アッシャーはドイツ生まれ

で、イギリスで働く国際銀行マンである。

この小説のタイトルである「蜘蛛の糸」が示唆するのは、ディグビー、ゴーマン、アッシャーの3人の仲は蜘蛛の糸のように絡み合うということである。彼らは、ビジネス、芸術、物質主義、戦争等に関して時として見解を異にし、蜘蛛の糸のように切れて一時的に別れるが、繰り返し紡がれる蜘蛛の糸のように再び仲を取り戻す。ユニオニストのイギリス系アイルランド人の家庭出身で、不在土地地主であったディグビーはナショナリストのゴーマンとは本来は敵同士の間柄だが、ゴーマンの政治家としての信念の強さ、正義感に惹かれ友情を保つ。

またディグビーは、アッシャーとの親交を通して、世界のビジネスは、アッシャーをはじめとする国際銀行マンによってコントロールされていることを実感し、この国際金融の協働を蜘蛛の糸に例え、「アッシャー及び彼と同類の人間たちが細い糸を紡ぎ、限りなく複雑で、子どもの手でも切ってしまうことができるほど繊細なクレジットの網をあらゆる文明の地に張り巡らせている」と述べ、ひとたび第一次世界大戦のような惨禍が起これば国際金融の動きは止まり、世界経済は麻痺すると悟る。<sup>5)</sup> そのことをアッシャーは、「世界の商業生活、産業生活全体の神経と筋肉が突然麻痺する。少しの間、ほんの少しの間だけであって欲しいと私は願うが、心臓は鼓動をやめ、静脈と動脈は血の流れが止まる」<sup>6)</sup>と隠喩的に表現しており、ジョン・ウィルソン・フォスターは、これは15年後のウォール街大暴落を予言していると指摘する。<sup>7)</sup>

確かにアッシャーの言葉からは、戦争はヨーロッパ全土に拡大し、ヨーロッパは疲弊し、世界の経済の中心はアメリカに移り、人々の投機熱はアメリカ企業に集中し、アメリカは過剰生産に陥り1929年のウォール街大暴落を招くという一連の流れが見え隠れする。そしてウォール街大暴落は、翌年、世界恐慌を引き起こし、国際金融は蜘蛛の糸のように脆弱であることが改めて証明される。現代においても同じことが繰り返され、2008年のリーマンショック、そして

2020年から今日に至る新型コロナウイルスの蔓延によって世界経済は麻痺状態に陥る。そういう意味で『蜘蛛の糸』は百年以上前にコロナショックの予兆を描いた作品ともいえる。

しかし同時に『蜘蛛の糸』は、コロナショックを含む一連の世界的金融、経済危機の克服の可能性も示唆している。それを端的に表しているのが、ディグビーの「蜘蛛の糸」に関する次の見解である。

嵐あるいはちょっと強い風が吹いただけでも蜘蛛の糸は切れ、空中で荒々しく波打って揺れる。人間は、戦争のように野蛮で、地面を闊歩し、自分が何をやっているかに気づくことなく蜘蛛の糸を突き破り、目の前にあった微かに光る美を破壊する。今起きていることはまさにそれだ。しかし人間の通過は、どんなに暴力的であっても、人間の通過以上のなものではない。たとえ軍隊が地を横切って行進しようとも、彼らの行進はやがて終わり、通り過ぎていく。彼らは絶頂期があるが、いつまでもそれは続かない。自然は限りなく続き、蜘蛛の糸は紡がれ続ける。<sup>8)</sup>

これは、蜘蛛の糸はたとえ脆弱で切れやすくとも常に新しい糸が紡がれている事実を示しており、たとえ戦争、金融破綻、疫病のような地球規模の危機があったとしても地球が存在する以上人間は叡知を絞ってそれらの危機を乗り越えてきたことを隠喩的に表現している。

またバーミンガムは『蜘蛛の糸』においてはイギリス、ドイツ双方に対して同情的である。アッシャーはドイツに味方すべきか、イギリスに味方すべきかで激しいジレンマに陥る。アッシャーの親戚は全てドイツ人で、兄弟と甥はドイツ軍の高官である。しかし彼はイギリスで銀行業を営んでおり、ドイツに味方したらイギリスの金融を破綻に導くことになる。そしてディグビーもアッシャーの苦悩に同情し、国際金融ビジネスは人種、国、言語、宗教の束縛を超えた世界中の人間の協働を必要とすることを強調する。

「アッシャーの仕事を考えた時、」私（ディグビー：筆者注）は言った。「その途方もない複雑さ、無数の人間がお互いに信頼しあうこと、そして最終的にはひとりの人間、ひとつの会社に全幅の信頼を置くことにかかっている。人種、国、言語、宗教のすべての束縛を完全に超越して、ある意味これらのどれよりも大きい、世界規模の、国際的ビジネスの存在。それは人間が為す偉大な行いだ。イギリス人、ドイツ人、白人、黄色人種、キリスト教徒、仏教徒、イスラム教徒といった枠を超越した、ただただ人間的な行いだ」<sup>9)</sup>

世界中の人間の協働の必要性は、新型コロナウイルスをはじめとする疫病との戦いにおいても当てはまる。疫病はしばしば戦争に例えられる。異なるのは、戦争が特定の国と国との戦いであるのに対し、疫病との戦いにおいては世界中すべての人間が一丸となる必要があることだ。新型コロナウイルスが爆発的に蔓延した時、中国や特定のイスラム教国がその発症国と見なされ非難の矛先が向けられるケースが生じた。しかしサンジヴ・クマールが指摘するように、疫病はただ単なる一国家の危機ではなく、地球の危機、人類の危機であり、疫病との戦いにおいてわれわれに求められるのはただ単なる包括的ナショナリズムではなく、「共生を必要とする、国境を超越した地球規模のナショナリズム」なのである。<sup>10)</sup> 包括的ナショナリズムとは、多様な人種、宗教、価値観等を受け入れるリベラルな国家の姿勢のことで、同一の人種、宗教、価値観等による支配を推進する排他的ナショナリズムの対義語である。疫病との戦いにおいては包括的ナショナリズムでは不十分で、必要なのは地球規模のナショナリズムであり、バーミンガムの言葉で言えば、「イギリス人、ドイツ人、白人、黄色人種、キリスト教徒、仏教徒、イスラム教徒といった枠を超越した、ただただ人間的な行い」ということだ。

そのような意味で『蜘蛛の糸』は、世界中の人間の協働によって新型コロナウイルス及びそれに続くコロナショックの克服は可能であるこ

とを示唆した現代的な意義と価値を持った作品といえよう。

### 『フランスの従軍司祭』と『ペスト』における戦争と疫病に対峙する人間像

『フランスの従軍司祭』は、バーミンガムが、1915年から1917年までの間、司祭として第一次世界大戦でイギリス軍に随行した際の従軍記であり、従軍司祭を志願した動機に関して自叙伝『麗しき場所』*Pleasant Places* (1934) の中で述べている。

バーミンガムは、1913年発表の演劇『ジョン・リーガン將軍』*General Regan* がロンドンで大きな成功を収めた後、同年、それまで21年間住んでいたアイルランドのウェストポートを去り、10月から12月までアメリカでの講演旅行へと旅立った。そして、第一次世界大戦勃発の翌年、1915年4月には2度目のアメリカ公演旅行へと出発し1か月後ダブリンに戻ってきた。バーミンガムが帰国して目にしたのは以前とは全く異なるアイルランドだった。第一次世界大戦を、脅迫的な暴君に対する当然で正義の戦いと見なす人々と、イギリスの窮地はアイルランドの好機と見なす人々でははっきり2分されており、急先鋒のナショナリストたちはイギリスの敗北とドイツの勝利を望んでいることがやがて明らかになった。バーミンガムはイギリスが正しく、ナショナリストのアイルランドが間違っているのは完全に明白だと見なした。そこでバーミンガムは、アメリカから帰国直後、従軍司祭の任務に志願した。最初は海軍希望だったが年齢が高過ぎるということで却下された。多分、陸軍からも同じ理由で拒否されただろうが、バーミンガムは当時のアイルランド総督の司祭を務めており、彼がバックアップしてくれてすぐにフランスの戦場に赴くこととなった。<sup>11)</sup>

そして『フランスの従軍司祭』によれば、バーミンガムが戦場で目にしたのは、東西古今、疫病と戦う医療従事者の崇高さを想起させると言ってもいい、兵士たちの崇高な姿であった。

戦争は前線で見れば地獄である。私はそのことに少しの疑いもさしはさむ人間に出会ったことがない。しかしそこは悪魔ではなく英雄が住む地獄だ。そして人間の本質は、戦闘という恐ろしい緊張にさらされた時、想像もできない高みに達する。戦う軍隊と寝起きを共にしてきた者は兵士たちに対する称賛の念に満たされ、そして、われわれが忌み嫌う戦争ではなく、それを戦う兵士たちを心から祝福する。<sup>12)</sup>

さらにバーミンガムは、負傷を負って前線を離れた兵士たちにも称賛を送る。

しかし前線の背後、遠くかけ離れた場所でも、むさ苦しく惨めなものよりもわれわれに称賛の念を起こさせるものの方がはるかに勝っている。ここでもわれわれは、戦争ではなく、兵士たちを称賛する。われわれは、彼の功績を喜ばしく思い起こし兵士の失敗を忘れる。<sup>13)</sup>

この後、バーミンガムは「負傷兵たちの忍耐、彼らの無言のヒロイズムは称賛しても称賛し切れない」と続ける。これらはまさに疫病と戦う医療従事者と彼らを支える関係者に対しても同じように送られるべき称賛であり、カミュ『ペスト』においてペストと戦う医師リユー、旅行者タルー、市役所職員グラン、新聞記者ランベール、パルヌー神父らに対して送られるべき称賛であると言えよう。

バーミンガムは兵士たちを称賛しているとはいえ、「われわれが忌み嫌う戦争」と述べているように必ずしも戦争を肯定しているわけではない。『蜘蛛の糸』の中でドイツ人アッシャーに対する同情が見られるように、『フランスの従軍司祭』においてもドイツ兵に対する同情が見られる。バーミンガムは従軍司祭としてフランスに滞在中に、「マダム」という愛称の女性が経営する民宿に幾度か泊まった。バーミンガムは過去マダムほど心の優しい女性には会ったことがないという。彼女はすべての生き物を愛しており、ドイツ人さえも嫌っていなかった。時々、昼食時、主人が新聞でおびただしい数の

ドイツ兵犠牲者に関する記事を読んで喜びの言葉を発するのを聞いて、マダムは「かわいそうな子たち。おぞましいこと、おぞましいこと」と言いながら主人を叱りつけるのだった。<sup>14)</sup>

バーミンガムが基本的に望んでいたのは、『スペインの黄金』*Spanish Gold* (1908)、『ジョン・リーガン將軍』、第2次世界大戦を題材にした『宥和策』*Appeasement* (1939)、『国境を越えて』*Over the Border* (1942)、『善意』*Good Intentions* (1945) 等の小説からも察せられるように、世界の人類の融和と協調、すなわち「世界規模のナショナリズム」であった。

『フランスの従軍司祭』に描かれた兵士たち同様、「無言のヒロイズム」「世界規模のナショナリズム」の精神を体現しているのがカミュ『ペスト』*La Peste* (1947) に登場する前述の人物たちである。この小説は、1940年代、フランスの植民地支配下にあったアルジェリアの沿岸の都市オランで発生したペストを描いている。4月、ネズミが大量に死ぬようになり、リユー医師の自宅が入る建物の管理人が原因不明の病気で亡くなったのを皮切りに、20人余りが同じ病気で命を落とした。そこでリユーはオラン医師会長のリシャルに新たな患者を隔離するよう要請したが、知事の許可が必要と却下された。その後も亡くなる人間は増え続け、リユーと老医師カステルはこれがペストであることを確信した。ここでペストと戦争の類似性が語られる。

これまで世界は、戦争と同じほどペストにも見舞われてきた。しかし、ペストと戦争は、いつも同じく、備えのできていない人びとを見つけ出す。…(中略)…ひとたび戦争が起きると、人びとは言う。「こんなことは長続きはしない。あまりにもばかげている」。確かに戦争はあまりにもばかげているだろう。だからといって、長続きしないという保証にはならない。ばかげたことはいつまでも続くのだ。自分のことばかり考えるのをやめれば、私たちはそれに気づくだろう。わが市民は、この点において、他の人びとと変わりがなかった。彼らは自分のことば

かり考えていた。つまり、彼らは人間を中心に考えていたのであり、災禍が起こるなどは想定もしていなかった。災禍は人間の尺度で測ることなどできない。だから人びとは災禍は現実起こるものではないと考え、やがて過ぎ行く悪夢と見なすのだ。しかし悪夢はつねに過ぎ行くわけではない。悪夢から悪夢へと過ぎ行くのは人間たちの方なのだ。それもまず第一に人間を中心に考える人たちである。<sup>15)</sup>

ここでは戦争と疫病に共通の発生原因と拡大原因が端的に語られている。発生原因は、人間が備えもなしに自分たちのことばかり考えている、つまり人間を中心に考えているからであり、そして拡大原因はこんなばかげたことは長続きしないという楽観的思考である。現にパーミンガムが体験した第一次世界大戦の発生原因はヨーロッパ列強の帝国主義政策の衝突であり、拡大原因のひとつに1914年のクリスマスまでには終わるだろうという連合国側の楽観論が挙げられる。<sup>16)</sup>そして、戦争にしても、疫病にしても、人間が自分のことばかり考えるのをやめれば、長続きすることを防げるだろう、すなわち他人のことをおもんばかりで行動を起こしてこそ終戦にいたる、あるいは終息するということをカミュは強調している。

そこで旅行者タルーの呼びかけでボランティアの保健隊が組織される。すぐに加入を承諾したのがリユー医師で、その後グランに次いでパヌルー神父が加わり、封鎖された町からの脱走だけを考えていた新聞記者ランベールも彼らの献身的な働きに心打たれ保健隊入りを決意する。そしてカミュは、保健隊が、『フランスの従軍司祭』に描かれた兵士の「無言のヒロイズム」に等しい性質を備えていることを示唆する。

保健隊において献身的に働いた人びとは、実際にも、それほど賞賛に値することをしたわけではない。というのは、彼らはそれがなすべきただひとつのことであると知っており、そう決心しないことは当時としては信じがたかったであろう。この保健隊は、市民たちがいっそう深

くペストにかかわる助けとなり、病気が存在するからには、闘うためになすべきことをなさねばならぬ、それをある程度彼らに納得させたのだ。<sup>17)</sup>

保健隊の中でもっとも目立たぬ「無言のヒロイズム」を体現しているのが市役所職員グランであり、「フランスの従軍司祭」ことパーミンガムとの類似性が顕著である。パーミンガムがイギリス軍に司祭として志願したのは50歳の時で、グランもまた「50がらみの男」で、ともに小説を書いていた。そしてともにその年齢ゆえに表に立って活躍することはなく、パーミンガムは前線に旅立つ兵士に祈りを捧げ、戦死者の弔いの儀式を行う一方、グランはペストに関する記録と統計の事務作業に携わり、保健隊に行動の指針を提供する。それは「グランのようなヒーローらしきところの微塵もない男が、いまでは保健隊におけるいわば秘書の仕事を引き受けていた」<sup>18)</sup>という1節が示すように、無くてはならぬ後方支援であった。次の、記録と統計の作業を快く引き受けるグランの描写は、彼の無言のヒロイズム、すなわち彼の人間としての本質を顕著に示していると言えよう。

彼は持ち前の善意によって、いいですよ、と言った。彼は小さな仕事で役に立つことだけを望んでいた。他の仕事をするには年を取りすぎていたのである。18時から20時まで、彼は時間を割くことができた。そしてリユーが心からの礼を言うと、彼は驚いた。「いちばんむずかしい仕事ってわけじゃありませんね。ペストがあるから、防がなくちゃいけない。明らかなことです。まったく、すべてがこんなにかんたんならいいんですが」。<sup>19)</sup>

人間は戦争や疫病といった死と隣り合わせの極限状況に置かれた時、良い意味でも悪い意味でも人間としての本質を現す。『フランスの従軍司祭』と『ペスト』によく似た状況が描かれている。

『フランスの従軍司祭』において、兵士たち

は軍事基地で食堂に即席のステージを作り、楽団を招いてコンサートを催した。ところがコンサートに間に合うよう注文していた新調のピアノが届かず、楽団は音が外れる古いピアノを用いなければならなかった。おまけに突然停電し、飼い犬が吠え初め、コンサートはほとんど中止に追い込まれかけたちょうどその時、新しいピアノが到着し、兵士たちはランプ、ろうそく、カンテラで灯をともし執念でコンサートを実現させるのだった。<sup>20)</sup>

一方、『ベスト』では、オランでベストが猛威を奮っていた時、市立オペラ劇場で『オルフェオとエウリディーチェ』が上演された際の逸話が述べられている。オルフェオが舞台中央で倒れオーケストラ演奏が止んだ時、1階席の観客が立ち上がって、ゆっくりと客席を離れ始めた。しかし人びとの動きは少しずつ加速して、ささやき声は怒号へと変わり、群衆が出口に向かって殺到し、叫びながら押し合った。<sup>21)</sup>

『フランスの従軍司祭』と『ベスト』は、ともに死と隣り合わせの極限状況に置かれ、本質を吐露する人間像を描くと同時に、兵士たちや保健隊員たちのように無言のヒロイズムに満ちた人間たちがいる限り必ず終戦あるいは終結に向かうという信念を表現している。それは、オランでベスト宣言がなされた後に、小説を書くことを趣味とするグランに会ったリユー医師の次のような感慨のうちに見られる。

おそらく彼は一冊の本か、あるいはそれに類するものを書いているのだ。そう考えて、ようやく試験所に着いてからも、リユーは安らいだ気持ちでいられた。このような印象を抱くのがばかげているとはわかっていたが、けっこうな趣味に熱中する慎ましい公務員がいる。そんな町にベストがほんとうに居座ることができるとは信じられなかった。まさしく、ベストの渦中にこのような熱中のための余地があるとは想像できなかったし、だからこそ彼は、事実、わが市民たちにあってはベストに未来はないと判断したのである。<sup>22)</sup>

一方、『フランスの従軍司祭』の中ではバーミンガムは次のように述べている。

たぶんわれわれはこの戦争というまさにぞつとする状況の中で、すべての任務をジョークと扱おう、彼の身の上にもふりかかる最悪の事態を笑い飛ばそうとする兵士のたゆまぬ努力を発見する。…(中略)…大英帝国の兵士たちは、どこの出身であろうと、恐怖の眼前でも冗談を言う。それはたぶん冗談に代わるものは恐怖か涙でしかないからである。他人はわれわれを誤解するかもしれない。しばしばわれわれは自分たちが理解できない。サム・ウェラーやマーク・タプリーをうちのめされた戦場の英雄とみなすことは容易ではない。しかしながら、フランスとベルギーでの偉大な戦いで勝利を収めつつあるのは、サム・ウェラーの巧みな機転の働きとマーク・タプリーのしばむことを知らない陽気さによるものである。<sup>23)</sup>

サム・ウェラーは、チャールズ・ディケンズ『ピクウィック・ペーパーズ』*Pickwick Papers* (1837)において主人公ピクウィックをサポートする機知とユーモアに富んだ召使で、マーク・タプリーもやはりディケンズの『マーティン・チャズルウィット』*Martin Chuzzlewit* (1842-1844)で同名の主人公に召使として支え、常に楽天的で、逆境下においてこそ陽気さを発揮する。ここでバーミンガムは、イギリス、アイルランドをはじめとする大英帝国の兵士たちを、このふたり同様、どんな逆境においてもユーモアの精神を保ち続けていると称賛し、それゆえに戦争には勝てるという確信を表明している。

『フランスの従軍司祭』は、『ベスト』同様、どんな逆境においても人間は「無言のヒロイズム」の姿勢を保ち続けることで乗り越えられることを示唆した、現代的な意義と価値を有する作品であると言える。

## 『我らの犠牲者』と『コレラの時代の愛』 —疫病、戦争に翻弄されながら永続する愛—

バーミンガムの短篇小説集『我らの犠牲者』には16篇の短篇小説が収められている。そのうち、表題作「我らの犠牲者」をはじめとする8篇が第一次世界大戦を題材にした作品で、人間が死と隣り合わせの極限状況に置かれた時、どのような本質を顕わにするかを描いている。中でも「意中の娘」“His Girl”は、負傷し、死に瀕した絶望状況の中でひとりの美しい娘の写真に遭遇し、彼女に恋し、彼女を永遠に探し求める兵士を描き、ガルシア・マルケスの『コレラの時代の愛』 *El amor en los tiempos del colera* (1985) を想起させる。マルケスの小説に描かれているのは、内戦とコレラに翻弄されるコロンビアで、愛する女性を19世紀の終わりから50年以上待ち続け、ついに愛を成就させるひとりの男性の波乱万丈の人生である。この小説の、内戦とコレラにまつわる時代背景は次の通りである。<sup>24)</sup>

コロンビアは19世紀初頭、シモン・ボリーバルの指揮のもと、スペインからの独立戦争を繰り広げ1819年に独立を達成する。しかしその後国内は富裕者層の保守党と新興工業者層の自由党の対立が絶え間なく続くようになる。1884年に大統領に再選された保守党のラファエル・ヌニェスが、政治と教育にカトリック教会が参加することを認めたために自由党が反乱を起こし、1885年には内戦に発展した。ヌニェスはこの内乱に勝利したが、1894年に彼が死ぬと再び両党の間の緊張は高まった。そして1899年には自由党急進派による蜂起が起こり、1902年まで続く千日戦争が勃発した。この戦争に勝利した保守党のラファエル・レイェスが大統領に就任すると、独裁は強化され、保護貿易に基づいて国内工業の育成が図られた。しかし1929年の世界恐慌によって経済が不安定に陥り、翌年には自由党政権が復活した。1946年、自由党の政策失敗によって再び保守党政権が誕生すると、保守党が自由党に対するテロを繰り広げるように

なった。一方の自由党は党首ホルヘ・エリエル・ガイタンが農民、労働者、学生から圧倒的な支持を受け、1948年の大統領選では当選確実といわれたが暗殺され、後にボゴタ騒動が起き、1946年から1950年代末までのコロンビアは「暴力の時代」を迎えることになる。

コレラに関しては、世界でこれまでにコレラ感染の爆発が起きたのは7回で、起源は1817年インドのガンジス川で汚染された米によるものだった。この小説は1881年から1896年の5回目、1899年から1923年の6回目の感染爆発の時期と重なっている。

小説の結末で、50年以上を経て結ばれることとなった主人公フロレンティーノ・アリーサとフェルミーナ・ダーサは船旅をするが、長引いた内戦とコレラのため川は荒廃し船は遅れる。次の1節は、逆境の中にあつてこそ愛は深まるというこの小説のメッセージを的確に表現しているといえよう。

にもかかわらず、船が遅れたおかげで、2人に思わぬ幸運が巡ってきた。《愛は災厄の中でより偉大で高貴なものになる》。(大統領スイート)の湿気のせいで、信じられないような無力感に襲われ、何もしゃべらずに愛し合えるようになった。ペランダのひじかけ椅子に座り、手を握り合って想像もしなかったような時間を過ごし、ゆっくり時間をかけてキスをし、苛立つこともなく酔い痴れたように愛撫し合った。<sup>25)</sup>

フロレンティーノ・アリーサは17歳の郵便局員の時、13歳の少女フェルミーナ・ダーサと愛し合うようになり、やがてふたりは結婚を約束する。フェルミーナは内戦が終わるまで結婚は待った方がいいのではないかとと言うが、フロレンティーノは内戦が終わることはありえないのではないかと考えた。これ以降もふたりの愛がコレラと内戦に翻弄されていく様子が描かれている。フェルミーナの父親ロレンソは、内戦で村々が灰の山に変わり、田畑が荒廃してゆく中、娘を貴婦人に育て金持ちの男性と結婚させるために額に汗流し働いてきたとフロレンティー

ノに告げ、娘との結婚を許可しない。ロレンソは娘にフロンティーノのことを忘れさせるために旅に連れて出る。ある夜、保守党、自由党どちらに属するか分からない2人の兵士が木に吊るされて殺されているのを目撃する。明け方、彼らも兵士に銃を突き付けられどちらの党かと詰問され、保守党と答え命拾いする。

フェルミーナは、フロンティーノを諦め、医者フルベル・ウルビーノ博士と結婚する。フルベルの父親はコレラで命を落とし、フルベルはコレラの撲滅に尽力していた。ふたりがヨーロッパへ新婚旅行に出かけている間、打ちのめされたフロンティーノは郵便局の仕事をやめ、船旅に出る。それからフェルミーナとの愛を取り戻すまでの50年の間に、フロンティーノは600人以上の女性と関係を結ぶが、彼女への愛は決して衰えることはなかった。

フェルミーナの妊娠を知った時も、フロンティーノは、ウルビーノ博士はいずれ死ぬと決めつけいつまでも待つ覚悟を決めた。そのため彼はカリブ河川運輸会社で働き始めた。そしてフェルミーナを取り戻すことを人生の唯一の目的と定め、その日のために母親に家の改装を行うようせつづいた。母親はフロンティーノの恋煩いを「うちの息子の病気はたったひとつ、コレラなのよ」と口癖のように言い続け亡くなった。

一方、フェルミーナの結婚生活は徐々に歯車が狂い始めた。彼女の父親の怪しげな仕事の実態が明らかになり、ウルビーノ博士は義父を国外へと追いやる。これをきっかけに夫婦の間には亀裂が生じ、夫は患者の女性と浮気し、それを知ったフェルミーナは、次の寝室での会話が示す通り、夫の死を望むようになった。

寝室にしつらえられた祭壇の前にひざまずいてお祈りを上げる前に、彼は悲しげに溜息をつけて身体の不調を訴えるのをやめて、真剣な顔でこう言った。(私はもう長くないように思うんだ)。彼女はまばたきもせずこう答え返した。

「そのほうがいいんじゃないありません。そうなれ

ばお互いもっと安らかな気持ちになれますわ」<sup>26)</sup>

その後、フェルミーナは従妹の住む村へと旅立ち、夫とは2年間の別居生活を送ることとなる。そして彼女とフロンティーノが望んでいたウルビーノ博士の死は、彼がオウムを捕まえようとして階段から足を踏み外し落下して死亡するというあっけない形で訪れる。約半世紀を経て交際を再開したフロンティーノとフェルミーナは船旅に出たお互いの愛が真実だということを確認め合う。そして彼らの愛はコレラ、内戦に翻弄されたがゆえにより一層深みを増していることを顕示してこの小説は終わる。

船長はフェルミーナ・ダーサに目を向けたが、その睫は冬の霜の最初のきらめきをたたえていた。次いでフロンティーノ・アリーサに目を戻すと、その顔からは揺るぎない決意と何ものも恐れない強い愛が読みとれた。限界がないのは死よりもむしろ生命ではないだろうか、と遅ればせながら気づいた船長は思わずたじろいだ。

「川をのほり下りするとしても、いったいつまで続けられるとお思いですか？」

フロンティーノ・アリーサは53年7月11日前から、ちゃんと答を用意していた。

「命の続く限りだ」と彼は言った。<sup>27)</sup>

「限界がないのは死よりもむしろ生命ではないだろうか」と思わせる愛を描いたもうひとつの作品にパーミンガムの、第一次世界大戦を題材にした短編小説「意中の娘」が挙げられる。

イギリスで休暇を終えた将校たちはフランスの戦場に戻るためにロンドン・ヴィクトリア駅を列車で発ち、ドーヴァーの港付近のホテルで船を待っていた。しかし悪天候のため船は後6時間出発しないと聞かされ将校たちは落ち込む。そのうちのひとりである「私」は、誰か話し相手はいないかとあたりを見回していると、知り合いのデイントリーから肩をたたかれた。デイントリーは常に興味深い話を持っており、話し上手な男だった。退屈していた私はこれ幸

いと彼の話を聞くことにした。

それは、彼らの共通の知り合いであるシムコックスという、現在は司令官に出世している将校に関する話だった。デイントリーと彼の妻はイングランドで、戦争で負傷した将校たちを収容する療養所を開いていた。そこに収容されてきたのがシムコックスで、戦場での体験をデイントリーの妻に語る。シムコックスが戦ったのは、1916年7月、第一次世界大戦最大の激戦であるソンムの戦いのうちのひとつ、マメの森での戦闘だった。シムコックスは前進中に、敵の砲弾が膝を貫通し動けなくなり放置された。足を縛り、ブランデーを呑み、痛みを和らげた。そして近くにたばこ入れが落ちていたので、拾い上げるとひとりの娘の写真が入っていた。シムコックスによれば、「優しく、訴えかけるような、パッチリした目で、穏やかで無垢な顔立ちで…可哀そうに、ひとりぼっちで、彼女を邪悪な世界から守ってくれる真の強い男性を求めているかのように写真からこちらをじっと見つめていて、それでいて尋常ではない魅力を持った娘」ということだった。そして仮装ドレスを着ているのがさらに彼女を魅惑的にしていたとのことだった。<sup>28)</sup>

娘に一目惚れしたシムコックスは、夜は彼女が天から自分を見下ろしてくれていると感じ、日中は横になり娘の写真を見つめていた。そしてもう自分は生きられないと思った時には娘の声を聞いたような気がした。そしてシムコックスは、その写真が無ければ諦めて死んでいただろう、おかげで彼の足は思ったほど痛まなかったと語った。

2日後、イギリス軍がマメの森を手中に収め、シムコックスを発見し救助した。その後、彼はロンドンに帰還し、病院を経てデイントリーの療養所へと移った。娘に絶望的なほど惚れ込んだシムコックスは、彼女をなんとしても見つけ出すと決意した。手掛かりは全くないが、シムコックスは偉大な愛の力がきっと自分を娘のところに導いてくれると信じた。

デイントリーの妻は娘の写真を見た時、どこかで会ったような記憶があると言った。その

後、パット・シングルトンという札付きの不良青年将校が療養所に収容されて来て、着いたその日から乱暴狼藉を働いた。シングルトンを見たシムコックスは居間に駆け込んできて、写真の娘にそっくりだ、兄弟か従兄弟に違いないと言った。しかしシングルトンには姉妹も従姉妹もいなかった。

そこでデイントリーはシングルトンを呼び出した。シングルトンは説教されるものと思ひ込み、おずおずとやって来たが、デイントリーが娘の写真を見せて、娘に見覚えはないかと尋ねた瞬間、急に勝ち誇った態度に変わった。そしてデイントリーをからかいながら娘にまつわる真実を語った。それを聞いたデイントリー夫妻は驚愕し、シムコックスに真実を語るべきかどうかと煩悶するのだった。

デイントリーから、これは涙を誘う話か、それともとんでもない悪ふざけか、どちらだと言うかと問われた「私」は、それはシムコックスの観点から見るか、シングルトンの観点から見ると答えるのだった。

同じ愛を主題にした作品とはいえ、『コロナの時代』のような結ばれる愛の物語ではない。しかし、シムコックスが娘を愛する気持ちはフロレンティーノのフェルミーナに対する愛に勝るとも劣らず、「限界がないのは死よりもむしろ生命」と実感させる作品である。

## おわりに

これまで論じてきたように、バーミンガムの『蜘蛛の巣』『フランスの従軍司祭』『われらの犠牲者』は、疫病小説の古典と言われるカミュ『ペスト』、マルケス『コレラの時代の愛』等を想起させる類似点が多く、戦争、疫病の中で人間はどう生きるべきかの指針を示している。バーミンガム、カミュ、マルケスが示唆するのは、戦争、疫病の終結に必要なのは「無言のヒロイズム」であり、「地球規模のナショナリズム」である。そしてバーミンガムの言葉を用いるのなら、人間の本質は、戦闘あるいは疫病という恐ろしい緊張にさらされた時、想像もで

きない高みに達する。

これに加えて戦争、疫病を生き延びるのに必要なのは、ひとつは、バーミンガムが『蜘蛛の糸』の中で「自然は限りなく続き、蜘蛛の糸は紡がれ続ける」と述べているように、戦争、疫病は必ず終結するという信念である。この自然の再生に関しては、バーミンガムは神学書『ろくろ』*The Potter's Wheel* (1940) の中でも、旧約聖書のエレミアの言葉を引用し、次のように述べている。

エレミアは予言した。巨大な破壊が、国を、都市を、寺院を修復不能な破壊に導いた時、陶工の、形のくずれた粘土に対する作業はすでに始まっており、彼にとって優れた器ができあがるのだ。それはたぶん、われわれはそうであると信頼するのだが、われわれ自身の人生にも当てはまるだろう。<sup>29)</sup>

そしてもうひとつは、バーミンガムが『フランスの従軍司祭』の中で述べているように、「すべての任務をジョークと扱おう、彼の身の上にふりかかる最悪の事態を笑い飛ばそうとする兵士のたゆまぬ努力」、すなわちどんな逆境においてもユーモアの精神を持ち続けることである。そのことは、バーミンガムが、アイルランドの女性の労働条件改善に尽力したイギリス出身の社会改革家ヒルダ・マーティンデイルに当てた手紙の中でも明らかである。

どこでも善を行うのは容易なことではないと私は思います。確かにアイルランドでは絶望的に困難です。私自身の経験では、実際の絶望を避ける唯一の望みはものごとのコミカルな面を見ようとする断固たる決意です。人間は皆、何度も何度も失敗を繰り返します。もし人間が失敗から笑いの糧を引き出すことができなければ、ただ落ち込むだけです。<sup>30)</sup>

どちらも、50年以上キリスト教聖職者を務め、2つの世界大戦をはじめあらゆる辛苦と困難を乗り越えてきたバーミンガムらしい説得力

に満ちた言葉である。

われわれが疫病、戦争に人間が対処するうえでバーミンガムの作品は数多くの示唆に富んでおり、現代的な意義と価値を有しているといえよう。

## 注

- 1) George A. Birmingham, *The Seething Pot* (1905, rpt., London: Edward Arnold, 1932), p. 297. 「エレミア書」第1章13節で、原文は、“I see a seething pot, and the face of it is towards the north.” 和訳は『聖書 新共同訳』（日本聖書協会、1993年）による。通常この小説がバーミンガムのデビュー作と見なされているが、それ以前に“Driven: A Story of Straide Moor,” *Temple Bar*, No. 395, October, 1893, pp. 237-251 を出版している。参照：Masahiko Yahata, The “Uncomic” Side of George A. Birmingham Commonly Known as a Comic Novelist (『別府大学短期大学部紀要』第40号、79-87頁)
- 2) Stephen Walker, “Prophetic’ Convent novel in the spotlight,” 21 September 2012, <http://www.bbc.com/news/uk-northern-ireland-19636180> (2021年10月20日閲覧)
- 3) 史実では、1914年にイギリス政府はアイルランド自治法を可決したが、同年、第一次世界大戦の勃発により同法は棚上げとなった。大戦では北アイルランドが軍需工業、兵士の派遣を通してイギリスの勝利に多大な貢献を果たし、その結果、北アイルランドはイギリスとの結びつきを深め、1921年イギリス＝アイルランド条約によって完全にイギリスに帰属することとなった。
- 4) このイギリスとEUの間での取り決めは「北アイルランド議定書」Northern Ireland Protocol と呼ばれ、2019年12月に締結され、これに伴いイギリスは翌年1月に正式にEUを離脱した。この議定書は1年の猶予期間を経て、2021年1月から発効したが、ユニオニストたちの激しい反発により停止に追い込まれた。そこで同年9月末を新たな猶予期限と定め、イギリスとEUは話し合いを続けてきたが、折り合いがつかず再度先送りとなり、本稿執筆中の2022年1月現在においても未だ暗礁に乗り上げた状態である。
- 5) George A. Birmingham, *Gossamer* (London: Methuen, 1915), pp. 131-32.
- 6) *Ibid.*, p. 276.
- 7) Jon Wilson Foster, *Irish Novels 1890-1940: New*

- Bearings in Culture and Fiction* (New York: Oxford University Press, 2008), p. 403.
- 8) *Gossamer*, p. 132.
  - 9) *Ibid.*, p. 299.
  - 10) Sanjeev Kumar, "Why Is the Pandemic Likened to a 'War'?", *The Wire*, 11 April, 2020, <https://thewire.in/world/coronavirus-war-military> (2021年10月24日閲覧)。
  - 11) George A. Birmingham, *Pleasant Places* (London: William Heinemann, 1934), p. 221-23.
  - 12) George A. Birmingham, *A Padre in France* (New York: George H. Doran, 1918), p. 17.
  - 13) *Ibid.*, pp. 18-19.
  - 14) "Madame," *Ibid.*, pp. 177-193.
  - 15) アルベール・カミュ／三野博司訳『ベスト』(岩波文庫、2021年)、58-59頁。
  - 16) Keith Jeffery, *Ireland and the Great War* (New York: Cambridge University Press, 2000), p. 13.
  - 17) 『ベスト』、195頁。
  - 18) 同196頁。
  - 19) 同197頁。
  - 20) *A Padre in France*, pp. 239-242.
  - 21) 『ベスト』、293-94頁。
  - 22) 同73頁。
  - 23) *A Padre in France*, pp. 302.
  - 24) 内戦に関しては、「コロンビアの歴史」<https://www.weblio.jp/wkpja/content/コロンビアの歴史> (2021年10月30日閲覧)。  
コレラに関しては、“Cholera,” updated: March 24, original: September 12, 2017, <https://www.history.com/topics/inventions/history-of-cholera> (2021年10月30日閲覧)
  - 25) G・ガルシア＝マルケス/木村榮一訳『コレラの時代の愛』(新潮社、2020年)、487-88頁。
  - 26) 同360頁。
  - 27) 同502頁。
  - 28) George A. Birmingham, *Our Casualty and Other Stories* (1919; rpt., Freeport: Books for Libraries Press, 1970), p. 116.
  - 29) Rev. J.O. Hannay (George A. Birmingham), *The Potter's Wheel* (London: Longmans, Green & Co., 1940), p. 7. 「エレミア書」の「陶工の手中にある粘土」のうちの18節1-10。
  - 30) Hilda Martindale, *Canon Hannay as I Knew Him* (London: Allen & Unwin, 1951), p. 5.